

---

# 三笠

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三笠

### 【Zコード】

Z0442E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

保次郎は祖父に連れられて三笠に入る。その艦橋でたたずんでいるとやつて来た老人は、歴史をテーマにしました。

## 第一章

三笠

横須賀には一隻の戦艦がある。それは古い戦艦だ。  
「これがその戦艦なんだ」

「ああ」

美濃保次郎の横には祖父の保正がいる。祖父は懐かしいものを見る目でその巨大な戦艦を見上げている。今一人はその三笠の前にいるのだ。

「日露戦争で活躍した。これは知ってるな

「一応はね」

保次郎はこう祖父に答えた。答える言葉にはこれといって灌溉はない。

「まだ残っているとは思わなかつたけれど

「色々あって残つたんだよ」

保正はこう孫に語るのだった。

「色々！？」

「水族館になつたり麻雀の場所になつたり

「またそれは随分と色々あつたんだね」

保次郎は祖父の言葉を聞いて顔を顰めつつまた三笠を見上げた。黒く巨大でしかもあちこちがゴツゴツしているその外観から水族館や麻雀を想像するのはかなり無理があった。少なくとも彼には想像がつかなかつた。

「どう思う？ それは

祖父は保次郎に顔を向けて尋ねてきた。

「それは

「ちょっとね

だが彼はその問いに戸惑う顔をするだけであつた。複雑な顔でいぶかしみ首を捻る。

「何て言えばいいかわからないよ」

「そうか、わからぬか」

「まあ中に入ろう」

とりあえずは祖父にこう提案するのだった。

「今は。それでいいよね」 10

「ああ、最初からそのつもりだ」

保正もそれに応える。そしてまずは自分から二笠のラッタルに足をかけるのだった。

「足元に気をつけるよ」

「何で?」

「何でも何も」

氣をつけると言われてキョトンとした顔になる孫に顔を向けてまた言つ。

「不安定だからだよ。知らないのか」

「軍艦に入るのってはじめてだし」

「そうだったか。はじめてか」

彼は今の孫の言葉に気付いた。そういうえばそうなのだ。

「この船の中に入るのも」

「だからここに来たんだよ」

彼は祖父に続いて先に進みながら答える。やはりラッタルは普通の昇りに比べていさか不安定だ。彼は慎重に足を進めながら祖父に言葉を返すのだった。

「どんなのが見てみたくてね」

「ずっと横須賀に住んでおるのにのう」

「こんな船があるってことも知らなかつたよ」

「いつも祖父に答えた。

「つい最近までね」

「だったら余計によかつたな」

保正は孫の言葉をここまで聞いてあらためて思うのだった。まさかここまで知られていないとは思いもしなかったのだ。

「ここに来たのは」

「一応ネットとか図書館で調べはしたよ」

保次郎も言ひ。

「日露戦争の頃の戦艦だよね」

「ああ、そうだ」

ラッタルを進みながら孫のその言葉に頷く。

「日本海海戦でな。旗艦だつたんだよ」

「百年以上昔の船なんだ」

もうラッタルは終わりに近付いている。間近で見るその黒い身体はさらに大きくなっている。まるで海の上に浮かぶ要塞である。

「そのわりには新しいね」

「整備しているからだよ」

ここで船の中に入る。船の中も百年前の船とは全く思えない内装だ。しかも軍事的色彩もかなり薄まつたものになつていて。所謂記念館になっている。

「それなりにな。それでも」

「それでも？」

「本当に訳のわからない使い方をされてきた」

彼はその艦の中を進みながら保次郎に話をする。孫はその後について来るだけだった。

「考えられるか？日露戦争に勝つた時の船だぞ」

「うん」

「それが水族館や麻雀の場に使われるなど」

「またどうしてそうなつたの？」

二人は展示室に入る。そこには様々な当時の資料が置かれている。パノラマ模型や日本海海戦の資料が保次郎の目にに入った。その中で話をするのだった。

「戦後にな。何もかも」

保正は忌々しげに首を横に振つて語る。

「そうなつてしまつた」

「所謂平和主義つてやつだね」

「この横須賀でも」

そうした団体が多い。自衛隊が何かするとすぐに出て来る。彼等の不思議なところはこの街にはあるならず者国家の工作員もいて自衛隊より遙かに好戦的な行動に従事しているのだがそちらには文句をつけない。いささかアンバランスな平和主義に見受けられる。

「それはあつて」

「今でもだよね」

これは保次郎も知っていることだった。横須賀ではそれこそそうした団体は何時でも見られる。ついでに言えば右翼も見られる。

「それは」

「かなり減ったがな。それでもな」

保正は日露戦争の資料のところに来て言つ。自然と保次郎も彼について行く。

「いるな、まだまだ」

「まあ僕はあの人達も好きじゃないけれど」

何となくだ。騒いでいるあの様子が好きになれないのだ。  
「けれどこうしたところもね。あまり」

「興味がないのか」

「今一つわからないんだよ」

日露戦争のその資料を見てもほんやりとした言葉であった。

「本当に大変だったのか凄かったのかも。全然」

「それはな」

祖父はそんな孫の姿を見て仕方ない、といった顔を見せてきた。  
何故か達觀したふうになつっていた。怒つていなかつた。

## 第一章

「今にいれば当然だらうな」

「そりやお爺ちゃんはあれだよね」

祖父に顔を向けて言う。日露戦争のときには見ていない。

「戦争を知ってるんだし」

「ああ、よくな」

その戦前に生きた人間なのだ。もう少なくなつてきているが。

「この街でよく海軍の軍艦を見ていたよ」

「長門とかそういうの?」

「立派だった」

顔を上げる。そして感慨の深い顔になるのだった。

「国のために戦つてな。今では色々言われてるが」

「それはね。仕方ないよ」

その感慨に対する孫の言葉は実に素つ氣無いものだった。

「負けたんだし」

「それだけか」

「うん、それだけ」

やはりこの返事も素つ氣無いものだった。

「負けたから。仕方ないじゃない」

「そう言つてしまえばそれまでだよ」

顔を下ろしてまた言つのだった。

「結局な」

「僕にはわからないんだよね」

保次郎はまた言った。

「こういうの見ても。戦争にじり」

「知らないか」

「テレビとかゲームでだけ」

現代日本の若者らしい言葉であった。それがよいのか悪いのかは

ともかくとしてそれが現実であった。やはり戦争を知らないのである。

「まあ最近のロボットアニメでは変な戦争のものもあるけれどね」

「あの白いロボットのか」

「幾ら何でも一人の人間があそこまでやつたり数機でどうとかできるとは思えないけれど」

その程度の知識も分別も彼にはあった。そもそもそんなおかしなアニメができること 자체が戦争を知らない何よりの証拠である。だがそれに気付かない者もいるのだ。

「それでも。やっぱり」

「それも。仕方ないな」

保正是あらためて呟く。「ここでも達觀が見える。

「実際に経験したわけじゃないからな」

「見たら一応は大変な状況だつたんだってわかるよ」

三笠のそこにある資料は少なくとも学校の教科書のそれとは違つ。日本を断罪するのではなく公平に見て資料が作られている。それはかなり真つ当な内容であった。

「それでも。やっぱり」

「そうか。わからぬいか」

「悪いけれどね。それでさ」

保次郎はまた言つのだつた。

「お腹空かない?」

「さつき食べなかつたか?」

「育ち盛りだから」

悪戯っぽく笑つての言葉だつた。

「何かまたお腹が空いてきたんだ」

「やれやれ、困つた奴だ」

そう言つがここで彼は言つのだつた。

「出るまで我慢してくれ」

「食べ物はないんだ」

「ジュークならある

」こう言葉を返す。

「それで我慢できるか？」

「そんなのじゃ我慢できないよ。仕方ないなあ

それを聞いて彼は決めた。彼にとつてはいささか苦しい決断だが。

「諦めるよ。ここを出てからでいいよ

「おお、今日は聞き分けがいいな

「そつちの方が美味しく食べられるしね

空腹は最高の調味料というわけである。とりわけ今の保次郎の年代ならば誰でもそうである。彼とても例外ではないのだ。

「だから。我慢するよ

「それなりい。さて

保正は展示室にあるものを全て見終わってから孫にまた声をかけるのであった。

「ここは終わったし次は何処に行くか

「艦橋には行けるかな」

保次郎は不意に祖父にこう尋ねてきたのだった。

「そここの絵に艦橋が描かれているけれど

「ああ、あれだな」

保次郎が指差したのは一枚の油絵であった。そこには海軍の軍人達が描かれている。それもまた三笠の絵であった。

「あの絵つてこここの艦橋のだよね

「そうだよ。あそこに行きたいのか

「絵に描かれているからね

興味を持ったのだ。そういうことであった。

「だから。どうかな

「それはいいことだな

祖父は孫のその提案を聞いてにこやかな笑みになる。そのうえでまた言うのだった。

「いい場所に気付いた

「そこまで言うんだ」

「当たり前だ。あそこが一番大事なんだからな」

彼にしてみればそうなのだ。それを孫にも告げる。

「あそこで指揮を執つたしな」

「真ん中の小さいお爺さんがだよね」

「待て」

孫の今の言葉には顔を顰めさせた。

「何が小さいお爺さんだ」

「だつて本当に小さいじゃない」

彼は何も知らないといった調子でまた祖父に言葉を返した。

「偉い人なんだろうけれど」

「あの人人が日本海海戦を勝利に導いた人なんだぞ」

「あの人人が！？」

「そう」

強い声で孫に説明する。

「その名も。書いてあるだろ」

「うん、それもかなり」

三笠の展示室だから当然である。その名は。

「東郷平八郎か。昔の名前だね」

「それだけか？」

「うん、それだけ」

またしてもあっさりと特に感慨も入れずに答える。そこには何の悪気もない。しかし思い入れもまたないのは確かなことであった。

「戦争を勝たせた人なのはわかつたよ」

「当時の情勢は？」

「それもね。一応は」

わかつてはいる。しかしそれでも感慨も思い入れも湧かないでのであつた。

## 第二章

「あるつもりだけれど」「やれやれ。困ったことじや」「実感ないから。それはそうとさ」「ああ、わかつている」困った顔であるが頷くのだった。いつして次の場所に向かう。「行くぞ、艦橋にな」「うん」  
「その絵に描かれている場所になようやく行くことになつたのであつた。  
「やつとだね。それじやあ」「一応言つておくが天井はないからな」  
それはもう絵にも描かれている。この当時の戦艦の艦橋はそつたのだ。後の戦艦や今の軍艦では艦橋も完全に建物の様になつているが当時は違つたのだ。  
「雨は。大丈夫だが」「流石に今日は降らないよ」  
快晴である。それこそ雲一つない。  
「幾ら何でもね」「そう。だからここに来たし」  
保正は言つ。  
「そうじつじとでな」「鳥のウンコが落ちて来たら嫌だな」「それはよける」  
今度は保次郎が素つ氣無く言い返された。  
「戦争をしていてそんなことは言つていられなかつたぞ」「また随分と大変だつたんだね」「じつじつことは実感する保次郎だつた。

「鳥のウンコはよけるしかないなんて」

「砲弾も当たるぞ」

もつと怖い言葉が出て来た。

「戦争だとな」

「あっ、そうか」

「そりかで済むのか」

どうしても実感を感じない保次郎であった。保正の言葉がまたしても呆れたものになる。

しかし呆れても。彼は言つのであった。

「まあいい。とにかく行くからな」

「さつきから結構言つてるけれど」

「御前があれこれと言つからだろ？」「が」逆にこう言い返された。

「わかつたらな。早く」

「わかつたからそれじゃあ」

「全く。本当に困った奴だ」

最後にはこんな愚痴も出た。長い話の後で展示室を後にして艦橋に向かつ。艦橋の上は雲一つなくそこから奇麗な海も横須賀の街並みも見渡せる。遠くには灰色の自衛隊の軍艦さえ見えた。

「凄くいい景色だね」

「普通に見てもいい場所だ」

保正の目が細いものになつていて。どうやら心からこの場所が好きらしい。

「絶対に一度はここに連れて來たかった」

「そうだったんだ」

「暫くそこで色々と見ていくとい」

不意にこう言つてきた。見れば今艦橋にいるのは彼等一人だけだ。

「わしはちょっと

「何処に行くの？」

「トイレだよ」

少し恥ずかしい顔になつての言葉であった。

「もよおしてきてな」

「何だ、トイレだつたんだ」

「すぐに帰つて来るけれどな」

「うん。じゃあそれまでの間は」

「景色でも楽しんでおけ。ついでに色々考えてな

「考えるねえ」

それにはまた首を捻る。今の彼にはどうしてもであった。

「何を考えても一緒だと思うけれどね」

「そう言わずに考えるんだ」

祖父としての言葉であつた。

「わかつたな。それもじつくりとな」

「わかつたよ。じゃあここにいるから」

「ああ。トイレが終わつたら戻つて来るからな」

そう言つてからトイレに向かう。保次郎は一人だけになつた。一人だけになるとただ空や辺りの海や街中を見ているだけだった。それなりに奇麗で気に入る光景であつたがそれだけだ。彼はどうしても考えることがなくぼんやりと景色を眺めているだけであった。それだけだった。

しかしその彼のところに。一人の男がやつて來た。

「あつ、誰か來たな」

彼は最初こう思つただけであつた。

「誰かな、一体」

「おや、若い人か」

やつて來たのは小柄な老人だつた。白い髪に鬚をしておりその顔つきは温厚そうなものである。にこにこと笑つていてその服は和服であつた。

「最近若い人がまた増えてきたな。何より何より

「！？ここによく来られるんですか？」

「左様」

老人は保次郎のその問いににこにことした笑顔のまま頷いてきた。

「ここはな。わしにとつては懐かしい場所でな」

「懐かしいつて」

「あれじやよ」

また言つてきたのであった。

「何度もここには登つたさ」

「何度もですか」

「それこそ何度もな。飽きる」とのなく

「飽きなかつたんですか」

「いい光景じやろ」

まずはこう言つてみせてきた。

「遠くまで見えるし。しかも見栄えがいい」

「まあそうですね」

見栄えがいいといつのは保次郎も同意だ。彼も気に入つてはいるのだ。

「見ていると」

「どうしたくなるかの」

「そのまま遠くまで行きたくなるような感じですね」

彼はこう答えた。これは偽らざる本音だった。横須賀に住んでいるせいいか昔から海には慣れ親しんでおり好きであるのだ。

「ずっと遠くまで」

「海はいいものじや」

老人はまた彼に言つてきた。

「奇麗でな。しかし」

「しかし?」

「波が高い時もある」

「ああ、それはそうですね」

これは横須賀に住んでいるからわかる。海といつものは決して穏やかなだけではない。時として荒れ狂うこともある。これはよくわかつっていたのだ。

「何かあつたらすぐに荒れますよね」

「そうじや。あの時も」

「あの時も?」

「天気は晴れていたがのう。波は高かつたんじや」  
語る老人の目が細まる。細まりはするのだがそこにある光は強い  
ものだつた。保次郎はそのこんとらすとに気付いて不思議な感じを  
憶えた。

「あの」

「ここに来たから日本のこととは知つておるな」

老人は保次郎が問う前に逆に彼の方から問い合わせてきた。

「まあ少しさ」

「少しでも知つているのと知つていないとでは大違ひじや」

保次郎に語りながら海に顔を向ける。今横須賀の海は静かに落ち  
着いている。

「海でも。何でもな」

「何でもですか」

「何も知らないで騒ぐ者達程困つたものはない」

老人の目が今度は憂いのものになる。どうやら何かあつたようだ。  
保次郎もそれを察した。

「あの、何か」

「日本のことも」

老人の今の言葉には憂いが込められていた。

「何も知らないで言うのは困つたものじやな

「それはそうですね」

これには保次郎も同意だつた。実のところ彼は市民団体というも  
のが好きではない。かといって右翼も好きではないがああした市民  
団体に關しては本能的に胡散臭いものも感じてゐる。何故市民だと  
いうのに先頭を行く者達の服装に一定の法則があるのかも気になつ  
ていた。不思議なことに私服であるというのにそこには一定の法則  
があるので。それが何故かは彼もわかつてはいけないが。

「あの時の日本は大変だった

「今よりもですか」

「一步間違えなくとも潰れていた

老人の言葉はこうであつた。

「ロシアが来ていたからな」

「当時は日本よりずっと大きな相手だったんですね」

「大きいどころではない」

老人は首を小さく横に振つて彼に答えた。

「それこそ。日本なんぞは鎧袖一蹴じやつた」

「一蹴ですか」

「そう、一蹴じや」

老人の言葉にはまるで当時に生きている人の酔うな説得力があった。保次郎は彼の会話と表情からそれを読み取つたのであつた。

「簡単にな。潰せる様な存在じやつた」

「それが日本に向かおうとしていたんですね」

「危なかつた」

老人は今度はこう述べた。

「本当に。朝鮮まで来ておつたし」

「そうしていよいよ日本に」

「迷つたわ、誰も」

これは本当のことであった。誰もロシアに勝てるとは思えなかつた。陸軍の首魁である山縣有朋でさえも。彼も最後の最後まで躊躇していた。明治天皇に至つては間違ひなく敗北すると考えておられた。これは帝が臆病でも日本を卑下しておられたのでもない。帝は日本とロシアの力の差を見て冷静に判断されたのだ。しかしそれでも。日本は戦わないわけにはいかなかつたのだ。そして日本は戦争を選んだ。

国民にしろ戦争すべきと主張していたがそうそう勝てるとは思つていなかつた。彼等とて愚かではないのだ。ましてや相手はあのロシアだ。ロシアへの恐怖はそれこそ骨身に滲みている。そうした存在を向こうに回しての判断であった。追い詰められていたのだ。な

おこの戦争は出征した弟を想うと謝野晶子も支持していたしどううわけか資本家といった存在をけなす癖のあつた夏目漱石も支持していた。ほほ誰もが支持していた戦争である。やるしかなかつたのだから。

「しかし。わし等は戦つた」

「戦われたんですね」

「そうじや」

ここで保次郎は氣付かなかつた。老人の言葉に。話に引き込まれてしだつていたが故に。

「引くことは許されない。負ける」とも許されない

「そんな戦争だつたんですか」

「戦わなければならぬ時もある」

よく使われる言葉であろうがこの時もそつだつたのだ。

「それで戦つた」

「そういう状況だつたんですか」

「誰も好き好んで戦いはせぬ」

この言葉もまた非常に重いものになつていて。そこには背負つている者の重みがあつた。

「しかし。戦うからには勝たなければならぬ」

「そうですね。それは」

「それで戦つた。必死にな」

「必死にですか」

「誰もが。それぞれの責務を果たした」

死んだ者も多い。しかしそれは無駄死にではなかつた。彼等は果敢に戦い、そうして死んだのだから。守るべきもののに。

「そしてその最後にな。陸で奉天があり

「海ではある」

「左様、日本海での戦いじゃ」

この三笠の最大の見せ場であった。ここで勝たなくては本当に日本はなかつた。

「あの戦いに負ければ」

「日本はなかつたんですか」

「その通り、わかってくれているんじやな」

老人は保次郎の言葉を聞いてまた目を細めさせた。そのことが何よりも嬉しいらしい。

「左様左様、本当になかつた」

「あの言葉ですよね」

展示室で見たあの言葉をここに思い出したのであった。

「皇國の興廢この一戦にあり」

「その言葉のままじゃった」

老人はその言葉を全て肯定するのだった。また真剣な顔に戻つて。

「あの戦いで負ければ日本はなかつた」

「今の日本は」

「そう。あの戦争は有色人種がはじめて白人に勝利を収めた戦いと言われたが」

これもまた教科書では書かれないことが多い。そもそも何故かこの戦争自体が日本の侵略戦争になつていて、実態は全く異なる。ロシアに対する防御戦争だつた。あの戦争をしなければ日本がロシアになつていた可能性は高い。少なくとも当時の日本人達はこのままで確実に日本はロシアになつてしまつ、そう危惧していた。日本はかなり深刻な状況下に置かれておりその中で戦つたのである。

その戦争への勝利は確かにそうした一面がありこれに勇気付けられた様々な人種が奮い立つた。しかし当時の日本はそんな意識はなかつた。ただ生き残る為に戦つたのである。それだけだつたのだ。

「実際そこまでは考えておらんかつた」

「そこまではですか」

老人もそれに言及し保次郎も聞いていた。

「うむ。生きたかつただけじゃ」

「それだけだつたんですか」

「皆。生きたかつた」

語る老人の目が暖かく慈愛に満ちたものになつた。

「それだけだつたんじやよ。あの戦争は」

「それで。勝つたんですね」

「必死に戦つてな。それだけだつたんじや」

「それで勝ちましたね」

見事なまでに。この海戦だけではない。日露戦争全体として奇跡的な勝利であつた。ロシアにとつてみればそれは単なる局地戦であつたろう。しかし日本にとつては全てを賭けた戦いでありそれに勝利を収めたのだ。これを『勝つたことになつて』と貶めている輩がいるがこれは卑しい所業である。こうしたことを言う輩にはおそらく歴史を語る資格などないであろう。当時の日本人のことを何一つ知らないからである。

「何とかな。それで今の」

「僕達がいるんですか」

「結果としてはそうなる」

老人は保次郎のその言葉を認めて頷いてみせてきた。

「しかしあれじゃぞ」

「あれ？」

「それを誇るつもりはない」

老人はそれは否定した。

「誇るつもりはな。しかし」

「それを忘れてはならないんですね」

「戦争を否定することは容易いのじや」

これはもう言つまでもない。嫌だ、と一言言えばそれで全ては終わる。だがそれで何かが解決するかといえば否なのだ。否定するだけでは解決はしない。

「しかし。そこから何かを学び取ることこそが

「大切なですか」

「だからこの三笠が残っているんじやよ」

老人は語りながらにこりと微笑んだ。その顔には見事な徳が浮か

び出  
てい  
た。

「こ」の船がな。わかってくれるかの」「はい」

保次郎はまた老人の言葉に頷いた。

「そういうことなんですね」

「左様。ではわかつてくれたのならいい」

「有り難うございます。それで」

今度は保次郎から老人に声をかけた。

「この船はこのままずつとここについてくれてるんですね」

「皆が望む限りな」

そう保次郎に答えるのだった。

「ずつとな。あるよ」

「そうですか。ずつとですか」

「こ」の船は日本と共にあった

日露戦争の後大正になり昭和になり。戦乱や混乱もあつたがそれでもここに留まり続けた。そのまま日本の歴史の一つになつているのだ。

「それはこれからもじや」

「僕達がこの船を知つてゐる限り」

「こ」の船だけではない

これはすぐに老人によつて訂正された。

「歴史を知つてゐる限り。だから」

「はい」

今度はすぐにわかつた。今何を言つべきか。

「学んでいきます。日本のこと」

「当時の日本だけではなくな。皆必死じやつたといふことを」

「そうですよね。それを忘れません」

「頼むぞ。わしはもう何もできんが」

今浮かべた笑みもまた暖かい笑みであった。何もできないとはいっても寂しいものではなかつた。実に暖かいものであつた。

「それでも。見ているからな」

「見ていて下さい。それできつと」

「日本をな」

「任せて下さい」

「その一言が欲しいのじやよ」

この言葉こそが彼が望んでいるものであつたのだ。その笑みがさらに暖かいものになる。それが何よりの証拠であつた。

「皆がそう思つてくれれば」

「いいんですね」

「わしは信じてあるよ」

やはり言葉には憂いも嘆きもない。

「今の日本人も。わし等と変わりないと」

「それは」

「いや、わしは知つておる」

それは否定しようとする保次郎の言葉こそを否定した。

「それもな。だから」

「いいんですか」

「うむ、信じておるから。だから頑張つてくれよ

「はい、僕達も必死に」

「わし等のことを忘れないでな。それでは」

不意に老人の格好が変わつた。それまでの地味な和服が消えそのかわりに濃紺の詰襟の服になつた。腕先の袖には金色の巻きがある。

「またな。縁があれば会おう」

「はい、また」

「何も卑下することも何も否定することもない」

老人の姿は消えていく。その中の言葉であった。

「何もな。全であるがまま受け入れて考えてくれ」

「はい」

「それだけでいい。後は頑張ってくれれば」

「この船も日本も」

「残つてくれる。それを見せてもらうぞ。あちらでもな」

それが最後の言葉であった。老人の姿は消えた。丁度その老人と入れ替わりに保正が艦橋に戻つて来たのであった。

「あれ、誰かいたのか」

丁度老人が消えたところであつた。保次郎の言葉も聞こえていたのでこう問うたのだ。

「うん、ちょっとね」

「もう帰つたのか」

「別のところに行つたよ」

こう保正に答えた。

「別のところにね」

「そうなのか。どんな人だつたんだ?」

「お爺ちゃんもよく知つてる人だよ」

保次郎は悪戯っぽく笑つて祖父に述べるのだった。

「よくね」

「わしもか」

「そうだよ。とてもね」

「誰なんだか」

保正は話がわからなくなつていた。それで孫の話を聞いていて思わず苦笑いを浮かべたのである。

「わからんわ。さっぱり」

「だから知つてるんだけれどね」

それでも保次郎は笑つて言う。

「まあいいよ。僕にもわかつたから」

「僕には、じゃないのか」

つまり人ではないのかと。こつ問うたが答えは変わらなかつた。

「そう、僕にもだよ」

「ふむ。それでも何かわかつたんだな」

「うん、よくね。これからや」

彼はあらためて祖父に對して言つのだった。

「何かと大変なことがあるだろ? うね、日本も」

「それは当然だな」

祖父は孫のその言葉に静かに頷いた。

「何時だつて大変さ。この船が活躍した頃は特にそつだつたけれどな」

「それがわかつたんだよ。だから」

微笑む。そのうえでの言葉であつた。

「僕も頑張るよ。僕なりに必死にね」

「ほづ」

孫のその言葉を聞いて。驚いた表情になる。だがそれは一瞬のことですぐににこやかな笑みになつてまた言葉をかけるのであつた。

「いいことを言つうじやないか。だがな」

「言葉だけじゃなくだよね」

「そう。動くことが大事だぞ」

「わかつてるよ。じやあ僕はこれから日本の為に」

「頑張れ。いいな」

「僕なりに必死にやるよ」

爽やかな笑みになる。その笑みで見るのは海の彼方だつた。

「これから日本の為にね。あの人達と同じで」

「応援してるぞ」

保正もまた孫と同じ海を見ていた。かつて運命をかけて戦士達が出て行つた海を。その海は何処までも青く清らかに澄んでいる。その海を眺めながらの言葉であつた。

2  
0  
0  
8  
•  
2  
•  
1  
3

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0442e/>

---

三笠

2010年10月8日15時04分発行